

異界の中の母なるものへの憧れ

——鏡花にとつての桃太郎・すゞ—— (上)

松 原 秀 江

要 旨

「幼い頃の記憶」の中の「今でも忘れることのできない一人の女」が、後に鏡花夫人になる桃太郎・すゞであることを、鏡花とすゞの境遇の共通点を中心に立証しながら、その原因となる鏡花の亡き母・すゞへの憧れを、麻耶夫人及び草双紙を中心に述べた。

キーワード…すゞ、幼い頃の記憶、色(情人^{いいひと})、すゞの清次への手紙、麻耶夫人、夫人利生記、釈迦八相倭文庫、天然痘と産褥熱、

絵本の春、金沢

異界の中の母なるものへの憧れ

一

鏡花がすゞに出会ったのは、二十六歳の折、明治三十二年（一八九九）一月、硯友社若手の新年宴会のことだった。彼女は当時神楽坂の芸妓で十七才、桃太郎と呼ばれていた。やがて彼女は、鏡花が胃病療養の為、転地していた逗子の一軒家に、週に二日程訪れて台所を手伝い、明治三十六年（一九〇三）一月、鏡花が牛込神楽町に一戸をかまえ転居するや、落籍されて同棲する。だが四月には、鏡花が弟・斜汀と共に、病床の紅葉と呼ばれて叱責され、すゞは泉家を去ったはずだった。

にもかかわらず、その半年後の同年十月、まるで「紅葉の死を待つかのように」⁽¹⁾、妻の座についている。

亡母と同じ名であるのも宿命の糸が感じられる⁽²⁾（傍点・傍線など筆者、以下同じ）。

などと云われるが、鏡花と桃太郎・すゞは、それ以上のもつと深い縁で、結ばれていたのではなからうか。

「幼い頃の記憶」（明45・5）を見てみよう。いささか長いが、その全文を改めて記せば、次のようである。

人から受けた印象と云ふことに就いて先づ思ひ出すのは、幼い時分の軟らかな目に刻み付けられた様々な人々である。

年を取つてからはそれが少い。あつてもそれは少年時代の憧れ易い目に、些つと見た何の關係もない姿が永久その記憶から離れないと云ふやうな、単純なものではなく、忘れ得ない人々となるまでに、いろ／＼複雑した動機なり、原因なりがある。

此の点から見ると、私は少年時代の目を、純一無雑な、極く軟らかなものであると思ふ。どんな些つとした物を見ても、その印象は長く記憶に止まつて居る。大人となつた人の目は、最う乾からびて、殻が出来て居る。余程強い刺撃を持つたものでないと、記憶に止まらない。

私は、その幼い時分から、今でも忘れることの出来ない一人の女のことを話して見よう。

何処へ行く時であつたか、それは知らない。私は、母に連れられて船に乗つて居たことを覚えて居る。その時は何と云ふものか知らなかつた。今考へて見ると船だ。汽車ではない、確かに船であつた。

それは、私の五つぐらゐの時と思ふ。未だ母の柔らかな乳房を指で摘み／＼して居たやうに覚えて居る。幼い時の記憶だから、その外のことはハッキリしないけれども、何でも、秋の薄日の光りが、白く水の上にチラ／＼動いて居たやうに思ふ。

その水が、川であつたか、海であつたか、又、湖であつたか、私は、今それを茲でハッキリ云ふことが出来ない。兎に角、水の上であつた。

私の傍には沢山の人々が居た。その人々を相手に、母はさまざまのことを喋つて居た。私は、母の膝に抱かれて居たが、母の唇が動くのを、物珍らしさうに凝つと見て居た。その時、私は、母の乳房を右の指にて摘んで、恰度、子供が耳に珍らしい何事かを聞いた時、目に珍らしい何事かを見た時、今迄貪つて居た母の乳房を離して、その澄んだ瞳を上げて、それが何物であるかを究めやうとする時のやうな様子をして居たやうに思ふ。

その人々の中に、一人の年の若い美しい女の居たことを、私はその時偶と見出した。そして、珍らしいものを求める私の心は、その、自分の目に見慣れない女の姿を、照れたり、含^{はにか}耻^{はにか}んだりする心がなく、正直に見詰めた。

女は、その時は分らなかつたけれども、今思つて見ると、十七ぐらゐであつたと思ふ。如何にも色の白かつたこと、眉が三日月形に細く整つて、二重瞼の目が如何にも涼しい、面長な、鼻の高い、瓜実顔であつたことを覚えて居る。

今、思ひ出して見ても、確かに美人であつたと信ずる。

着物は派手な友禪縮緬を着て居た。その時の記憶では、十七ぐらゐと覚えて居るが、十七にもなつて、そんな着物を着すまいから、或は十二三、せい／＼四五であつたかも知れぬ。

兎に角、その縮緬の派手な友禪が、その時の私の目に何とも言えぬ美しい印象を与へた。秋の日の弱い光りが、その模様の上を陽炎のやうにゆら／＼動いて居たと思ふ。

美人であつたが、その女は淋しい顔立ちであつた。何所か沈んで居るやうに見えた。人々が賑やかに笑つたり、話したりして居るのに、その女のみ一人除け者のやうになつて、隅の方に坐つて、外の人の話に耳を傾けるでもなく、何を思つて居るのか、水の上を見たり、空を見たりして居た。

私は、その様を見ると、何とも言へず氣の毒なやうな氣がした。どうして外の人々はあの女ばかりを除け者にして居るのか、それが分らなかつた。誰かその女の話相手になつて遣れば好いと思つて居た。

私は、母の膝を下りると、その女の前行つて立つた。そして、女が何とか云つてくれるだらうと待つて居た。

けれども、女は何とも言はなかつた。却つてその傍に居た婆さんが、私の頭を撫でたり、抱いたりしてくれた。私は、ひどくむづがつて泣き出した。そして直ぐに母の膝に歸つた。

母の膝に歸つても、その女の方を氣にしては、能く見返りくした。女は、相變らず、沈み切つた顔をして、あてもなく目を動かして居た。しみじみ淋しい顔であつた。

それから、私は眠つて了つたのか、どうなつたのか何の記憶もない。

私は、その記憶を長い間思ひ出すことが出来なかつた。十二三の時分、同じやうな秋の夕暮、外口の所で、外の子供と一緒に遊んで居ると、偶と遠い昔に見た夢のやうな、その時の記憶を喚び起した。

私は、その時、その光景や、女の姿など、ハッキリとした記憶をまぎく目に浮べて見ながら、それが本當にあつたことか、又、生れぬ先にでも見たことか、或は幼い時分に見た夢を、何かの拍子に偶と思ひ出したのか、どうにも判断が付かなかつた。今でも矢張り分らない。或は夢かも知れぬ。けれども、私は實際に見たやうな氣がして居る。その場の光景でも、その女の姿でも、實際に見た記憶のやうに、ハッキリと今でも目に見えるから本當だと思つて居る。

夢に見たのか、生れぬ前に見たのか、或は本當に見たのか、若し、人間に前世の約束と云ふやうなことがあり、仏説などに云ふ深い因縁があるものなれば、私は、その女と切るに切り難い何等かの因縁の下に生れて来たやうな氣がする。

それで、道を歩いて居ても、偶と私の記憶に残つた然う云ふ姿、然う云ふ顔立ちの女を見ると、若しや、と思つて胸を躍らすことがある。

若し、その女を本當に私が見たものとすれば、私は十年後か、二十年後か、それは分らないけれども、兎に角その女に最う一度、何所かで会ふやうな氣がして居る。確かに会へると信じて居る。

と。

鏡花は「広く流布してきた」⁽³⁾「いわゆる自筆年譜」⁽⁴⁾で、すゞとの出会いを、

明治三十二年一月、伊藤すゞと相識る

と、「じつにさりげなく」⁽¹⁾「記すが、しかしすゞは、この「幼い頃の記憶」の中の、

今でも忘れることの出来ない一人の女

だったのではなからうか。もっともこの文章は、明治四十五年五月の『新文壇』に発表され、この時鏡花は既に三十九歳、しかも末尾の文章は、まだ出会っていないことを示している。だがそれは、猛反対し既に亡い師の紅葉に、遠慮してのことであり（後述）、

確かに会へると信じて居る

どころか、もう「十年」以上も前に、既に「確かに」会っていたのではなからうか。

というのも、「母に連れられて船に乗って居た」「五つぐらゐ」の「幼い」鏡花（鏡太郎）が、「物珍らしさうに」「それが何物であるかを究めやうと」、

照れたり、含耻^{はにか}んだりする心

もなく、「澄んだ」「軟らかな目」で、「正直に」まっすぐ「見詰めた」、「見慣れない女」の年齢は「十七ぐらゐ」。それからおよそ「二十年」後、二十六歳の鏡花が、初めて出会った時の桃太郎・すゞの年齢も、十七歳（かぞえて十八歳）だった。船の上で見た「何とも言えぬ美しい」「派手な友禅縮緬」は、その女が素人ではないことを、物語っているのではなからうか。女の「傍に」は、幼い「私」・鏡太郎が「ひどくむづかつて（嫌がって）泣き出した」「婆さん」（遣り手か）が居り、女は「或は十二三、せいぐ四五であつたかもしれぬ」と、記している。村松定孝は、かつてすゞの朋輩でもあった神楽坂の畑井つる女の回想から、

桃太郎が蔦永楽の抱え（中略）としてお座敷をつとめるようになったのは、おそらく十四、五歳からで、と述べている。⁽⁶⁾「色」が「白」く、

眉が三日月形に細く整つて、二重瞼の目が如何にも涼しい、面長な、鼻の高い、瓜実顔

の、その「若い美しい女」の容貌も、『湯島詣』の主人公・蝶吉(すがモデル)に似て、少し「小肥」^(こふと)のようだが、若い時のすがの写真によく似ている。又その写真を見つめていると、「何所か沈んで居る」ような、「淋しい顔立ち」にも見えてくる。「人々が賑やかに笑ったり、話したりして居るのに」、その女だけが「一人除け者のやうになつて、隅の方に坐つて」いる様子は、「酒はよく飲」み清元と「踊を得意」としたが「名取ではなく」、芸達者な「名うての姐さん株が並び集う」賑やかな「硯友社の新年会」で、「ろくに口もきけず」「片隅に小さく」なつて、

ちぢこまつていたのではあるまいか

と、村松が記す「むつとり型」の冴えない桃太郎の姿にも重なるだろう。さればこそ、「鏡花と結ばれ合う奇縁も生じた」ろう(後に詳述)と、村松は推測するが、「沈み切つた顔をして、あてもなく目を動かして居た、しみぐ淋しい顔」が、「何とも言へず気の毒なやうな氣」がして、「母の膝」に居た「五つぐらゐ」の純心無垢な少年の心をとらえ、何かの折にふと思ひ出し(幼少年期も終りに近い「十二三」の頃、子供たちと遊んでいた鏡太郎は、「同じやうな秋の夕暮」、「偶と遠い昔」の「夢のやうな」「記憶を喚び起し」ている、四十にも近くなつた鏡花が、

夢に見たのか、生れぬ前に見たのか、或は本当に見たのか、若し、人間に前世の約束と云ふやうなことがあり、仏説などに云ふ深い因縁があるものなれば、私は、その女と切るに切り難い何等かの因縁の下に生れて来たやうな氣がする。とまで記さねばならない程の、忘れがたい「記憶」になつていたのである。

二

既に云われていることだが、後の鏡花夫人、即ち伊藤すがについて、今少し詳しく見てゆこう。すがの母親は、京都の商人の娘だった。土佐藩の浪人と識り合い、すがを産んで、その男に死なれると芸者に出、豪商の妾になつたらしい。すが五歳(かぞえ年六歳)の折、その男も破産すると、すがは芸妓屋に売られ、母親は行方不明になつて、吉原仲之町に育つたと云われている。⁽¹⁾⁽⁶⁾

『湯島詣』（明32・11）の蝶さん、即ち「六歳の年紀から仲之町」で育ち、

親も兄弟も叔父叔母もない。ただ手足と顔と、綾羅錦繡と、三味線と冷酒と踊とのみあつて存する、あわれな孤児

の蝶吉の身の上も、ほとんど桃太郎・すゞそのままで、と云つてよいだろう。母親も「旧京都のしかるべき商賈の娘」で、父親は「土佐の浪人」。「親々の思いも寄らぬ夫定めで」、「江戸」に「通げて」「根岸に隠れ」住むうちに、「時世」の浪にもまれて、「活計」を失い、母親は「仲之町の歌姫」に身を落とし、幼い娘と病氣の夫を抱え、やがて妾になつてしまふ。その内に米の相場が狂い「妾宅の主人」にかつた金の返済を迫られると、「情人」（最愛の人、娘の父親）も亡くし、すべてを運命と諦めた母親は、幼い娘（蝶吉）を年期十三年の約束で、仲之町に預けてしまふのだから。

「腰も据らず」、坐ることもできない頃から、「ええだらしが無い」と、「長気管で背を擲わ」され、

・泣けば舌の尖を捻じられ

・着物を疊んで背筋を曲げたと云つては折檻、踊がまずいといつては打たれて、体には生疵の絶間もないのに、

一緒に遊びたい子供たちに近付けば、

売婦め、お玉杓子め、汚らわしい！

と「一人除け者」にされて、「仰向けに引き返」され、「泥水」を飲んで「真蒼になつて帰ると」、「突然細紐でぐるぐる巻」に巻かれ、

「濡しよびれたまま高い押入の中に突込まれ」てしまふ。「同じ人間」に生まれて、幼いうちから「半日もままたぬ抱妓の身」だった。

「情人」が出来て孕めば、騙されて墮ろされ、気づいて文句を云えば

生意気な、文句をいうなら借金を出して懸るこつた（中略）、憚ながら大金が懸つてますよ。

とすかさず云われて

しつ越（いくじ）もない癖に、情人なんぞ拵えて、何だい、孕むなんて不景気な、そんな体は難産と極つてゐるから、（中略）死なないうちにお慈悲で墮してやつたんだ。商売にも障ります、（中略）面も生ッ白いし、芸も出来て、ちつたあ売れるからと大目に見て、我まをさしておきやあ附け上つて、何だと、畜生。もう一度いつて見ろ、言わなきゃあ言わしてやろうか、

などと、男か女かわからないような目茶苦茶なことを云って、殴りかかってくる。そんな人を人とも思わないような扱われ方は、すべてがその体験ではなかったにせよ、身の回りで起ったことも含め、「鏡花がずっとから直接聞いた」その「話に基づくもの」だったろう。そしてそれは、「五つぐらゐ」の幼い鏡花（鏡太郎）が、船の上で見た年は「十七ぐらゐ」で、色が白く、「目が如何にも涼しい」、美しい「派手な友禪縮緬」の女に、待ち受けていることも含めた、「しみぐ淋しい」現実だったかもしれない。

にもかかわらず幼い鏡花が、その女が「何とも言へず気の毒なやうな氣」がして、いつまでも「見返りく」したように、『湯島詣』の神月梓も、泥水稼業の仲之町で育ったにもかかわらず、「心は美しく、磨いた鏡のような」蝶吉を、「泥の中」の清らかな白い「蓮」のように思い、「あわれにいとおしく」「見棄て」られないでいる。それもそのはず梓のモデルである鏡花も、蝶吉（桃太郎）と似たような体験をしていたからである。既に指摘されていることだが、改めて今少し詳しく見てゆこう。

鏡花の母・すがが、明治十五年（一八八二）二十八歳で亡くなったのなら、江戸下谷で生まれたのは、壬申戸籍にも記すように安政元年（一八五四）、加賀百万石の御手役者（世襲で直参）、葛野流太鼓師中田万三郎の長女（初めての女の子で、しかも末っ子）としてだったが、慶応四年（一八六八、九月に明治元年）十四歳で、金沢へ移住している。この年の春、江戸詰め能役者たちに、国許帰還の命令が下っていたからである。そして明治三年には平民に指し加えられ、同五年（一八八七年）には扶持が打ち切られている。すがが清次と結婚したのは明治四年（一八八六）、すゑ十七歳、清次は二十九歳だった。

ここで先ず、鏡花（二十六歳）が桃太郎（十七歳）に出会った時、二人の年齢が、両親の結婚年齢にほぼ近いこと（のみならず、ずっと正式に結婚したのが、満年齢で鏡花二十九歳の折だったこと）を、おさえておこう。云い換えれば、恋しいと慕い続けた母親と同じ名の女が、その母親が父親と結婚した時と同じ年齢で、しかも、

東京へ帰れたらその日に死んでも構わない。

『由縁の女』三

東京へ帰れさえすりゃ、（死んでも可い。）

『由縁の女』六

とまで云い／＼していた母親と同じように、東京に憧れ、現に今その東京にいる鏡花の目の前に、その母親と、「前世紀の活きた映画」かと思う程よく「肖」た「娼」（『湯島詣』二十三）で、現われたのである。更に又その女は、鏡花同様両親に別れ、「母親の夢ばかり見て」

(同三十五)、母親に抱かれた幼い頃の唯一の写真を、後生大事にしていた。⁽¹⁾

その上更に鏡花の両親、清次とすゞの出会いも、桃太郎(蝶吉)の生母が、土佐藩の浪人と知り合い辛苦をなめたように、江戸から明治へと激動する「時世」が、背後にあつてのことである。幕府崩壊後、いわば江戸から追われるように、金沢へやってきた「敗残の面影を宿す」すゞの家族は勿論、芸能や美術、工芸を奨励する加賀藩の伝統を背景に、工名政光の名をもつ腕のいい彫金師だった清次も、「卓抜の技量」を持つ「名人気質の職人」だったが故に、藩崩壊後却って「貧乏と縁が切れなかつた」。⁽²⁾『一之巻』の「彫刻師」の冒頭で、鏡花も次のように云っている。

貧しきを心に留めず、気ままに註文を打棄て置くを、名人上手と謂ふべくば、彫刻師なりし予が父も、名工の一として世に数へられ給ひなむ。

と。

もつとも清次とすゞは、蝶吉や桃太郎の両親のように、親の許さない仲などでなく、正式に結婚していた。にもかかわらず、彼女たちの親のように、お互がお互の「情人」⁽¹⁾以外の何ものでもなかつたようだ。明治六年「当時銅器製造の盛ん」だった「越中高岡へ出稼ぎにで」ていた清次宛のすゞの手紙を見よう。笠原の指摘するように、⁽²⁾春陽堂版鏡花全集巻十五の口絵に、清次の刻んだ平打の簪とともに掲げられたその手紙(それは清次の手紙に対する返事だった)には、次のように記されている。

⁽¹⁾ すこしの間もわすれ不申あつにつけさむいにつけおあんじ申上候どうぞ／＼おわるくおなり遊ばし候らはぬようくれ／＼もねんじ上候 ⁽²⁾ おと、様おか、様の御事はかならず／＼おあんじ下されまじく候まことに／＼御丈ぶにて相かはらず ⁽³⁾ 夕方には一ぱいはじまりおさむしき御やうす何なりとおさかなとおさけをばおとりこれはあなた様のちやとおよけ遊し候てよりおあがり遊し候まことに／＼おうれしくなみだが出で候 ⁽⁴⁾ これとてもつねからあなた様がおやさしきゆゑとぞんじ上候 ⁽⁵⁾ 御兩しん様の御事わたくし事

大じに／＼いたし候間かならず／＼おあんじ被下まじく候澤田屋様のおこともいろ／＼おあんじ遊ばし御申よこしこれもこん月内にはきつと／＼おあけ候間これまたおあんじ被下まじく候お出遊し候とさつそくおしらせ申上候おと、様よりもおへんじお出し

候はずながら何やらむた／＼と御ぞんじどつりなされ候へばよろしく／＼申上候やう御申にござ候^⑦ 二かい兩親よりもよろしく／＼申上候やう申きけ候^⑧ 東京兄よりも昨日たよりござ候よろしく申上候やう申まゐり候これも七月内にはもどり申候と申まゐり候^⑨ くれ／＼もおからだおだいじに遊し候やうよく／＼ねがひ上候あすは二十五日に候間相かはらず卯辰天神様へおまゐり申あなただ様のごぶじ^⑩ またおさいくの御ひやうばんのよきやうにとよく／＼おねがひ申上候と今よりぞんじおり候^⑪ 申上度おんことは山／＼ござ候へどもおへんじまでにあら／＼申上候
何も／＼めで度かしく
と。

清次とすゞの「結婚の事情についてはよく分からない」^②と、云われている。だが、「泉家の住まいのあつた下新町には能役者が何人か住んでいた」^②よう、「変り者の多い」上新町・下新町には、

明治維新前には、狂言師、野村万蔵、森田流の笛の森田多賀蔵も（中略）住んでいた。（中略）茶道、師匠の中で戦後亡くなった柿崎宗仁といふ人は、床屋の主人であり、茶花を生けるのは天下一品の名人であつた。表具屋の浅野広作は能のシテ役者、傘屋の多々良は狂言師、按摩の越川三吉は明治の塙保己一といわれた程の学者であり、

などと云われ、清次は又、「加賀藩細工方金工七代目水野源六」の弟子だったが、その御細工者たちは、「能の諸役を兼ねることが定められていた」^②らしい。既に見たように、すゞは生まれてから幼年期が終り、大人になろうとする十四歳^⑨まで過した東京が忘れられず、清次も又「故郷^③の人で居ながら」、

そりや東京が好きでね、母に亡くなられてから後にも、都合が出来たら、東京へ出て住みたい、住みたいと言っていた。

〔由縁の女〕六

のなら、名人気質（芸術家肌）の清次は、「雛の箱」で作らせたという本箱の中に、『白縫物語』や『大和文庫』（後述）『時代かゞみ』などの草双紙を詰め込み（『いろ、抜ひ』）、江戸詰めの能役者の「娘らしい教養を身につけて」やって来た、「美しい」すゞの「優しさ、繊細さ」に、一と目惚れしてしまったのではなからうか。まるで「情人」（恋人）のように^⑩。笠原はこの清次の手紙に應えるすゞの返事

についても、

写真でみる範囲での判断だが、なかなか繊細な筆づかいで、鈴は加賀藩江戸詰めの能役者中田氏の娘らしい教養を身につけていたといえよう。

と云い、又、

この手紙にあふれているのは鈴の優しさ、繊細さであり、一家の平穩である。

と指摘している。「主婦の小遣い」としては大きすぎる」と云われる「そば代二十銭」も、「親たちの生前好きだったもの」の中に、「蕎麦」のあること（『由縁の女』三）を思えば、何の不思議もない。

手紙の傍線③の部分も、清次に対する親たちの、目に入れても痛くない程の愛情にあふれていると、云ってよいだろう。⑤には、その清次の親に対する日頃の「やさし」さが、率直に記され、それがすゝの親兄弟にまで及んでいること、⑦⑧によって明らかだ。

下新町二十三番地の家は土地台帳によると間口三間（五・四三メートル）、広さ十八坪八合（六十二平方メートルほど）だということからそんなに広くない。⁽²⁾

と云われる「泉家の二階」に、すゝの両親は「厄介になつていた」のである。加賀藩の御手役者としての「年金四十両」では、八人の子も養いかね、三男の金太郎（後に宝生流シテ方として名をなす）⁽¹⁾を、養子に出していたにもかかわらず、維新当時は二十九両、それも明治五年には打ち切られ、やがて家業を継いだ長男の孫惣（手紙傍線⑧の兄）にも先立たれて（明治十年、四〇歳）、すゝの父親・豊喜（万三郎）の戸籍は、明治十二年清次方へ付籍となり、その死亡（明治十四年、七十四歳）届も、清次がしている。⁽⁷⁾そんな尾羽打ち枯らした「落魄の思い」の中にいる、すゝの両親及び兄の、そして勿論すゝの、清次に対する感謝の気持を、⑦⑧は伝えている。さればこそ、清次の両親を大切にせずにはいられない、すゝの心を伝える②⑥の文面があり、又だからこそ、片時も離れていては寂しくてならない程、大事でいとしい息子・清次の心をわが心として、「祖母さんだつてそうだったが」（『由縁の女』六）と云われるような、すゝの古里・東京に憧れるきての姿があつたのだろう。『由縁の女』には又、

嫁を粗末には出来ません。

（一）

―何をさつしゃる、大切な嫁の児を―

（十二）

などと云った言葉があり、すゞの死後、すゞの着物類を虫干して、孫の鏡太郎らを楽しげに遊ばせるきての姿が伝えられている。そんな光景をすゞが見たら、④のように涙を流して感謝したに違いない。勿論この涙を流す程の喜しさは、①⑨⑪の文面にあふれ出る、清次に対するすゞの、離れている「すこしの間もわすれ」られない程の愛情を示すものだが、それも⑩を見れば、清次の名工として知られる、人間としての生き方への、すゞその人の共感に支えられていることが、よくわかる。

明治・大正・昭和の三代を、現役のまゝ、生き抜いた鏡花の作家としての原点はこのように、たった一人のしかも末っ子の女の子として、大切にされて育ったに違いないすゞを中心に、心を一つにして寄り添い、労り合い愛し合って、まるで夢のように美しく健気に生きる者達に見守られて、幼年期を過ごしたことにあつたと、先ずは云ってよいだろうか。既に見たように、美しく華やかではあっても、それだけに清らかで「しみぐ」と「淋しい」気の毒な者から、目をそらすことのできない幼い鏡花（鏡太郎）の心も、そんな中で育まれたものと思われる。

三

だがそれだけに、幼い者にとって、特に男の子にとっては、その核とでも云うべき母親を失った時の驚きと悲しみは、どれ程のものだったろう。昭和三年の自筆年表には、

明治十六年十二月、母、年二十九にして。……

とある。明治十六年は十五年の誤り、そして「母、年二十九にして。……」の「……」部分は、すゞ死去の時満年齢でわずか九歳、数え年で十歳だった幼い鏡花の茫然自失の態を示し、それが後々（昭和三年、鏡花五十五歳）まで、あるいは一生にまで及んでいることを、示しているのだろうか。この年表は更に、

（イ） 明治十七年六月、父にとまなはれて、石川郡松任、成の摩耶夫人に詣づ。涇の流に合歡の花咲き、池に杜若紫なり。なき母

を思ひ慕ふ念いよく深し。

と続くが、既に見た「幼い頃の記憶」を、『新文壇』に発表した前年の明治四十四年六月、『新小説』に掲載した「一景話題」の最初に、「夫人堂」と題する類似の文章がある。よく知られるものだが、改めて見てみよう。

(ロ) 十歳ばかりの頃なりけん、加賀国石川郡、松任の駅より、畦路を半町ばかり小村に入込みたる片辺に、里寺あり、寺号は覚ええず、摩耶夫人おはします。なき母をあこがれて、父とともに詣でしことあり。初夏の頃なりしよ。里川に合歓花あり、田に白鷺あり。麦や、青く、桑の芽の萌黄に萌えつゝも、北国の事なれば、薄靄ある空に桃の影の紅染み、晴れたる水に李の色蒼く澄みて、午の時、月の影も添ふ、御堂のあたり凡ならず、畑打つものの、近く二人、遠く一人、小山の裾に数ふるばかり稀なりしも、浮世に遠き思ありき。

と。黒点部分など、『枕草子』の冒頭部分(二段)⁽¹²⁾をふと思ひ起こさせる、この「浮世」離れたまるで夢のように美しい文章は、「由縁の色」である「紫」(「由縁の女」七)のベールを被つて、次のように始まっている。即ち、

神戸にある知友、(中略)摂津国摩耶山の絵葉書を送らる、その音信に、

なき母のこひしさに、二里の山路をかけのほり候。飄飄き渡る霞の中に慈光治き御姿を拝み候。

しかくと認められぬ。見るからに可憐し言はんかたなし。此方もおなじおもひの身なり。遙に其のあたりを思ふさへ、端麗なる其の御姿の、折からの若葉の中に梢を籠めたる、紫の薄衣かけて見えさせ給ふ。

と。そして(ロ)の文章は、やがて次のように続き、「此方」、即ち三十八歳にもなる鏡花の、あふれんばかりの「おなじおもひ」を、伝えるのである。即ち、

夫人堂の大なる御厨子の裡に、綾の几帳の蔭なりし、跪ける幼きものには、すらくと丈高う、御髪ごみづかの艶に星一ツ晃々と輝くや、ふと差覗くかとして、拝まれたまひぬ。浮べる眉、画ける唇、したゝる露の御まなざし。環珞の珠の中にひとへに白き御胸を、来よとや幽に打寛ろげたまへる、気高く、優しく、かしこくも妙に美しき御姿、何時も、まのあたりに見参らす。

今思出でつと言ふにはあらねど、世にも慕はしくなつかしきまゝに、余所にては同じ御堂の又あらんとも覚ええずして、此の年月

をぞ過したる。

などと。この文の点線部分は、既に見た清次宛の手紙から推測できる、すゞの姿そのままではなからうか。幼い鏡太郎が、幼いだけに正直で純粹な目で捉えたすゞの姿も、同様だったと思われる。その胸に、いだかれて過ごした、「夢にも忘れ」られない「母の面影」(『夫人利生記』)が、「こひし」く「慕はしく」、何かの折にふと沸き上がる、

神よ、めぐませたまへ、憐みたまえ、亡き母上。

(『誓之巻』誓)

といった願いとともに、そのすゞの面影は、「熱心な信心家」(「おぼけずきのいはれ少々と処女作」)だった「父にとみなはれて」、「ともに詣で」た松任市行善寺の摩耶夫人像に重なり、守り本尊になったのだらう。書斎の机の傍には、観音像と共に摩耶夫人像がいつも置かれ、鏡花が歩いて詣でることのできる市内の通妙寺にも、この夫人像があつたと云われている⁽¹³⁾。

しかもそれだけではない。「夫人堂」の中には、

伝へ聞く、摩取山切利天王寺夫人堂の御像は、其昔梁の武帝、女人の産に悩む者あるを憐み、仏母摩耶夫人の影像を造りて大功德を修しけるを、

云々の文章のあることに、注目するのだろうか。『夫人利生記』(大13・7)には、「まだお娘御のように見えた、若い」母親に「手を引かれて」、「摩耶夫人の御寺へ」「お参り」する「十ぐらいまでの小児」の姿が語られている。そしてその「御寺」、即ち「蓮行寺の摩耶夫人の御堂の壇の片隅」には、「お産の祈願をしたものが、礼詣りに供え」たと云われる、「嬰兒を抱い」た「千枚千人の婦人」の写真が、さながら「生きたままの絵馬」のように、「月影に」「青」く「厳に端しく、清らか」に鎮まっていると、記されている。そして更に明治三十五年にも、

婦女童幼の歡迎止まず、

(『續帝國文庫』『釋迦八相倭文庫』解題)

と云われた「万亭応賀の作、豊国画。錦重堂板の草双紙、」(『釈迦八相倭文庫の挿画のうち、摩耶夫人の御ありさまを、絵のまま』)「肉置の押絵にした」ものの中として、次のように記しているのである。

やがて「夫人が、一度、幻に未生のうない子を、病中のいためる御胸に、抱きしめたまふ姿は、見る目にも痛ましい。その肩にた

れつつ、みどり児の頸を蔽う優しき黒髪」は、いかなる女子のか、活髪をそのままに植えてある。……

と。この文の「」部分が、点線部分も含め、鏡花蔵書本の『釈迦八相倭文庫』にはあるのかどうか、又幼い頃鏡花がすゝの絵解で聞いたことなのか、未公開で見ることのできない今はわからない。が、(注)(15)の「いろいろ抜ひ」の後半「」部分をみれば、鏡花がすゝに、この草双紙の絵解をしてもらったことがあり、『釈迦八相倭文庫』が、すゝの死と深く結びついていることがよくわかる。とすればこの文章の傍点・点線部分は、あるいは亡くなる少し前、遺していかなければならないとし子を抱きしめるすゝの姿に、重なるのかもしれない。『夫人利生記』には、摩耶夫人の様々な「姿像のうちには」、

胸ややあらわに、あかんぼのお釈迦様を抱かるものがあるから

などと記すが、鏡花は金沢でこの姿の夫人像を作らせ、いつも机の傍に置いて大切にしていた。『夫人利生記』は、筆者（即ち、鏡花）を思わせる主人公・樹島が、『釈迦八相倭文庫』の絵にそっくりな摩耶夫人像を、父・清次に重なるかと思われる「淳朴な仏師」に依頼し、「夢にも」忘れない「なき母の面影」「そのまま」の夫人像を、東京で受け取ることと終っている。

壬申戸籍には、すゝ死亡の原因を、天然痘と記すにもかかわらず、

次女やゑを生んだときの産褥熱で世を去った

との通説が出るのはいつ頃だろう。それは、釈迦誕生後の麻耶夫人の死去と、深くかわると思われるが、ここで改めて、水上瀧太郎の伝える鏡花の極端な細菌嫌いを見てみよう。次のように記されている。

泉家に於ては、鐵瓶の口、煙管の吸口、その外いろいろのものに、奥さん手製の筒が着せてある。中には千代紙で出来てゐるものもある。みな蠅よけなのだ。生ものはあたと恐いから一切たべず、御酒はぐらぐら煮立て、飲む。海老は溺死人を食ふからいけない、あれもいけない、これもいけないで、食物の種類は極めて少しに限定され、それも奥さんの手にかゝつたもので無ければなかなか信用しない。宿屋に泊つても食べる物は自分の部屋で煮かへし、汽車の旅で、車中アルコホル洋燈で鰻鮓を煮て食べるといふはかなさである。殊にコレ、とか赤痢でもはやつて来やうものなら、豆腐と煮豆の外にはお菜がなくなつてしまふ有様だ。

（「鏡花世界瞥見」）

などと。その通りであれば、余りの徹底ぶりに仰天しかねないが、それは生れつきの「異常な病氣らしい」と云うより、磯村らも云うように、⁽¹⁶⁾ 掛け替えのない母・すゞを奪い去った、天然痘への「深い」恐怖によるものだったろう。鏡花は「私小説的な作風から最も遠い作家のひとり」と云われるが、既に見てきたように、それでいて「少なくない」「自伝的傾向の強い作品」の一つ『一之巻』⁽¹⁸⁾ には、ひどい「天然痘」にかかり、盲目になった富の市が、鏡花その人とも読める「予」、即ち新次にとって、付きまとわれれば付きまとわれる程、「嫌悪の念」はどうしようもなく、顔を見るのも疎ましい、「虫のすかぬ」「不快」な盲人として描かれている。それも同じ理由からだったろう（鏡太郎の屈折した複雑な心情については後述）。すゞの死後可愛い妹たちも、——やゑは生まれてすぐ、他賀はわずか十歳で、養女に出されていなくなり、鏡花（鏡太郎）の囲りは、急に火の消えたように淋しくなつて、懐くことなど断じてない女が、二度（二人）も後妻に来るのだから。

このいわば一家離散の嘆きは、既に見たようにもつと極端な形で、桃太郎・すゞの経験したことでもあった。再び（ロ）の文（81頁）に戻り、（イ）と比較してみよう。「合歡の花（合歡花）」のあとの記述が、次のように違っている。

（イ）池に杜若紫なり。なき母を思ひ慕ふ念いよく深し。

（ロ）田に白鷺あり。麦や、青く、桑の芽の萌黄に萌えつゝも、北国の事なれば、薄靄ある空に桃の影の紅染み、晴れたる水に李の色蒼く澄みて、午の時、月の影も添ふ、御堂のあたり凡ならず、

と。

（イ）の「紫」のあとに「なき母」がくるのは、「紫」が「由縁の色」であるだけでなく、『笈ずる草紙』（明31・4、後に「紫道中」と改題）に登場する「紫」という名の「可憐な」少女、即ち、

鼓打の金春金之丞の秘蔵娘で、江戸の下谷から駕籠にゆられて藩主前田侯の本国の下邸まで乗打し、「誰いふとなく都落の紫といひ囃した」⁽¹⁹⁾

と記される少女が、すゞをモデルにしているように、すゞと深くかわる色だったからだろう。『絵本の春』（大15・1）にも、「昼間」は何も「見えない」「かし本の貼札」をした「土塀の壊れ木戸」の前で、「三日五日続けて」立って、

高島田で、紫色の衣ものを着た、美しい、気高い……十八九の

「お嬢さん」に「本を借り」、「草双紙」の「絵解」をしてもらう、「十余り」の少年・新坊の「不思議」な体験が記されている。その話を聞いた「卜筮」の小母さんは、

……ああ、悪戯をするよ。

とつぶやき、少年新坊に、

勉強盛りに、親がわるいと言うのに聞かずに、夢中になって、余り凝るから魔が魅した。(中略)新坊や、可恐い処だ。あすこは可恐い処だよ。

と諭すが、笠原の年譜、明治十三年(一八八〇)鏡花七歳の頃には、

これより先、母に草双紙の絵解きを、近所の娘たちから口碑、伝説を聞く。『白縫物語』のヒロイン若菜姫などは後年まで、関心の対象となった。

とあり、磯村も又、正月の「お買初の雪の真夜中」、「新版の絵草子」を美しい灯火の中で、すぐに買ってもらったりしただけでなく、物ごころつくと、母が江戸から(中略)いろいろな草双紙を新本のように綺麗に扱って持ってきたのを、引っぱり出して土用干のように並べて母に絵解きをせがんだ。鈴は鏡太郎のいとこたちや近所の子どもたちを集めて(中略)絵解をしてやった。芸能の血を引く鈴の朗読にはツボを心得たりズムと説得力があり、子どもたちを架空の幻想の世界へ導いた。

などと、鏡花が「いろ扱ひ」で語った以上のことまで記している。⁽¹⁶⁾鏡花は目に訴える文字だけでなく、江戸時代では当り前だった音読にも耐える文章のリズム、背景まで視野に入れた、目には見えない言葉のリズムまで大切にし、絵解を通して至福の時間を共にした、優しく美しく繊細な母・すがが、「記念」に遺して逝った『修紫田舎源氏』などの草双紙(絵草子)を、いつも身近に置いて、まるで「いろ(情人)」のように、いつまでも大切にしていた。⁽²⁰⁾

(ロ)に「白鷺」が続くのは、それが白鳥同様、死者の魂と考えられていたからである。だがその文章が、(イ)の六月同様「初夏の頃」なのに、ことさら「桃の影の紅染み」と続くのは、何故だろう。『絵本の春』には、読み始めるとすぐに、次のような文章がある。即ち、

異界の中の母なるものへの憧れ

弥生の末から、ちつとずつの遅速はあつても、花は一時に咲くので、その一ならびの堀の内に、桃、紅梅、椿も桜も、あるいは満開に、あるいは初々しい花に、色香を装っている。(中略) 特に桃の花を真先に挙げたのは、むかしこの一廓は桃の組といった組屋敷だった、と聞くからである。その樹の名木も、まだそっちこちに残っていて麗に咲いたのが……こう目に見えるようで、それがいかにも寂しい。

と。そしてそこには、「美しい婦の虐げられた」「伝説がある」と続いている。「旧藩の頃」、主人の「難病」を治す「生肝」の為に、「人買の手」から買収された、「美しい婦」の悲惨な死を伝える話が、語り継がれているというのだ。

満開に咲く「桃の花」と、「虐げられた」「美しい婦」の伝説。その「婦」が「紫色の衣ものを着た、美しい、気高い、……十八九の」「お嬢さん」だったかどうか、はつきりとは記されていない。だが、「水」も「蒼(青)」も「澄」も、美しく清らかな(そして気高い)母・すゞに憧れる、鏡花好みの女性を表わす言葉であることを思えば、「午の時」であるにもかかわらず、しんと雪の降りつもる「北国の事なれば」と注記しながら、「薄霽」や「月影」と共に記される「桃の影の紅」には、仰ぎ見る「気高く、優し」い摩耶夫人を通して、憧れの亡き母・すゞに再会するような熱い思ひが、幻のように桃太郎・すゞにまで重なっていたと、考えるのは考えすぎだろうか。

桃太郎・すゞが、母親に離れてから辛い目にあったように、孫を愛するきてがいたとはいえ、

何うも母上様がおありでないやうだ、そりやもうお召物のやうすでも能く知れる、お可哀相に

(「二之巻」彫刻師)

と噂する時、計屋のお嬢さん、秀の言葉は、秀のモデルが、家が近くよく遊んだしげ(二歳年上)であるだけに、実際のものだったろうか。しげの言葉でなかったとしても、周囲で囁かれ、幼い鏡太郎が耳にしていたかもしれない。そしてそんな現実こそ、すゞが「恋女房」(「由縁の女」六)だったにもかかわらず、清次が後妻を迎えなければならぬ理由だったと思われるが、

「学校へおいでと見えます。まあ、折角御勉強なさいましよ。ちつと遊びにおいでだとい、ね。(中略) 母様がおいでなさらずにつて、まあ何んなにお寂しからう。」

と溢る、ばかりの情の言葉、胸せまるほど嬉しくて、はき／＼ものも得いはざりき。

と鏡花は記すが、そんな優しい年上の女が、美人であればある程、豊かでもないどころか、「穴があいて」猫の「出入り」する表の「簀

の枝折戸」はそのまんま、家も「汚ないし、遊びに行ってもお菓子一つ出」ず、「まだ義務教育でな」い学校の「授業料」は、「半年分ほど溜めたまま踏みたおして卒業」するような（転校した一致教会派に属する真愛学校―後に北陸英和学校と改称―の授業料は無料だった）、たかが職人ふぜいの息子の鏡太郎が、周囲の悪童、特に資産家や士族の息子たちに、妬まれ蔑まれ、「一人除け者」にされて、苛められることがあったとしても、不思議ではない。資産家の長子でもある富の市に付きまとわれ、「七ツ八ツの幼児をあやす」姉のような秀と、「たわいなく」遊ぶ姿を見咎められて、

君はへつらふね。は、は、は、何時でも然うだ。まるで段の違ふ将基なくせに、（中略）は、は、は、負けておもしろがるとは妙な人だ。年紀もゆかないに。は、は、は、何でも秀さんの喜ぶのが嬉しいと見えるね。は、は、は、お殿様のおあいて将基だ。君は秀様におべつかをして居るのだ、如才のない。

と図星をさされて、「全身の血は頭にのぼり」、耳は「ぐわつ」と鳴り、家に帰って「あふぎ倒れて、わつと泣く、やるせない孤独な幼い新次（鏡太郎がモデル）の姿が、描かれている。

この部分は、

盲目の言葉皆中れり。

と続き、

亡き母上よ、許させ給へ、さる児は産ませたまはじを。

と終るが、鏡花最愛の祖母・きてが、ひどいあばたづらだったことを思えば、母・すゞが亡くなる時も、その徴候は見られ、それが先立つ若いすゞへのきての痛ましい程の愛情になり、残された孫たちを、精一杯愛さずにはいられない原因になっていたのかもしれない。

『昭葉狂言』（明29・11～12）にも、美しい年上の女に愛され、「腕力」だけでなく、「門閥」にも恵まれた「旧の我が藩の有司の児」国麿に、時には集団で苛められ、蔑まれる幼い貢の姿が、描かれている。

・何でえ、おりや士族だぜ。退け！

・汝平民じゃあないか、平民の癖に、何だ。

異界の中の母なるものへの憧れ

・平民も平民、汝の内や芸妓屋じやあないか。芸妓も乞食も同一だい。

といった国麿の罵詈雑言は、貢に親がなく、叔母に養われる「娼家の児」であること、しかもその貢が、小親の扮する牛若に、まるで母親に甘える小児のように、「愛らしい顔」で「傍目」もふらず夢中になって、「眉凛々しく眼の鮮な」一座の花形の小親に、「可愛が」られることを、妬み蔑んで発せられたものだった。それは、

彼奴等、おい、皆乞食だぜ。踊ってな、謡唄ってな、人に銭よう貰ってる乞食なんだ。内の父様なんか、能も演るぜ。む、謡も唄わあ。そして上手なんだ。そうしてそういつてるんだ。ほんとのな、お能というのは男がするもんだ。男の能はほんとうの能だけど、女のは乞食だ。⁽²⁴⁾

といった言葉でも明らかだろう。勿論鏡花と貢は同じではない。だが、既に指摘されているように、鏡花には次のような言辞がある。加賀ッぽは何だか好かない。郷里の悪口をいふやうだが、加賀の人間は傲慢で、自惚れが強くて、人を人とも思はない、頑固で分らず漢で、殊に士族などと来ては、その悪癖が判然と発揮されて、吾々町人共はまるで人間とも思はないと云つたやうな傲慢不遜な態度の不可好ない特性は、同郷人たる私でさへ嫌で嫌で仕方がない。だから人間としての加賀人程私の癪にさはる者はないのである。それに百万石だぞと云つた偉らがり、今日でも其の性格の奥に閃めいてゐるのが、何よりも面白くないと思ふ。

〔自然と民謡に―郷土精華(加賀)―「談話」〕

などと。「加賀の自然、金沢の天地」は、いつまでも「幼ない時分の追懐」と共に、「遣る瀬ない懐かしさ」の中で「想ひ」浮かぶにもかかわらず、これは、「生まれて(上京する)十七歳まで棲んでゐた」金沢の人に対する、嘘偽のない鏡花の想いだつたのだろう。『由縁の女』(八)でも、主人公・麻川礼吉(鏡花がモデル)が細君のお橘(桃太郎・スッがモデル)と共に、礼吉の生れ故郷・金沢について、

・人間が薄暗く濁っているから、自然衣服の色までもドスンとして冴えません。

・大嫌いな人間の多い処へ、一人で出向いてこつちへ親たちの骨を、敵の中から拾って帰るくらいな意気込んだから、本城(お橘のいる東京の家)の構がしっかりしていないでは、敗軍で通げるのに依頼がありません。

・いつも癪に障る癪に障るッて言っているお故郷だから、(中略)何だか一所に行つて、貴方の味方がして見たいわ。

などと云い合っていることでも、それは明らかだろう。「娼家の児」である貢（後に詳述）は、仲之町で育った蝶吉に重なり、鏡花と桃太郎は、出会った時から既に、あるいは生まれる前に、即ち未生以前に既に、一心同体の夫婦だったように思われてくる。

——この稿続く——

《注》

- (1) 新潮日本文学アルバム22『泉鏡花』
- (2) 笠原伸夫『評伝 泉鏡花』（白地社）
- (3) 吉田昌志「鏡花「年譜」覚書——生前年譜を中心に——」（文学2004 7、8月号）
- (4) 現代日本文学全集第十四篇『泉鏡花集』（改造社）「年譜」。後に小村雪岱追記を加え『鏡花全集』（岩波書店）巻一に「泉鏡花年譜」として収録。
- (5) この年齢は、少女が女になる頃。客をとることもできるようになる。
『由縁の女』二十七には、次のような「鞠唄」が記されている。
七つの年に身を売られ、
十五の年から勤めして、
いつか二十は越したれど、
いまだ定まる夫はない……
と。また、
十六七になるまでも、てふよはなよと育てられ、今ではくるわへ、身を売られ、月に三度の御規則で、……検査される其の時は、八千八
こゑのほとぎす、血を吐くよりも未だ難堪（づ）い、
などという「流行ぶし」もあつた（松原秀江『「たけくらべ」の中の「子どもたちの時間」——信如と美登利の恋——』（大手前大学論集第九号）。
更に云えば、複雑な環境の中で育つた美しい娘は、早熟で十四歳ぐらいでも十六七に見えたらしい（堀川浩之「資料紹介 仙台の浮世絵師・熊耳耕年の『月岡芳年塾入門記』」浮世絵芸術一七一 2016）。又十六七は女にとって最も美しい時期だったようだ。
- (6) 『定本 泉鏡花研究』（有精堂）
- (7) 殿田良作「泉鏡花の実際と作品」（國語國文第三二卷第七號）
- (8) 本岡歌子「鏡花の生れた下新町と津田左右吉」（鏡花研究三号）
- (9) 松原秀江「観音利生譚『はちかづき』論——方便力としての「鉢」の意味を中心に——」（『薄雪物語と御伽草子・仮名草子』和泉書院）、『本

異界の中の母なるものへの憧れ

- (10) 朝二十不孝」論―存在の根拠としての親―」(語文第41輯)、「鷗外と『高瀬舟』―子供たちの中の森鷗外―」(大手前大学論集第15号) 柳田泉も「鏡花伝き、がき」(『柳田泉の文学遺産』右文書院第三巻)で、次のように云っている。

このころ(すゞが金沢下りした頃)、鏡花の父の、下新町の家の二階に間借をしてゐた若い女の人がゐたが(それが何をしてゐたものか、何といふ名であつたか、といふことも、今日ではもう探るすべもあるまい)、この女の人が、どういふつながりでか、中田のすゞさんと仲のよい友だちで、おすゞさんは、度々此の二階に遊びに来た。それを下の細工場で働いていた鏡花の父が、見染めたのである。おすゞさんは、美しい娘であつたといふ。

と。

- (11) (7)には、「金太郎は十二歳の時、能楽室生流宗家へ内弟子になり、十四歳の時に松本弥八郎方へ養子入をしている。」とある。松本金太郎は「能楽師の幼時(其二)」(能楽書報第壹卷第九號)で、「辛棒」の続くように「成る可く貧乏人の子供」をと、望まれて行つたと云っている。

- (12) 春は曙。やうくしろくなり行、やまぎはすこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

夏はよる。月のころはさら也、闇もなを、はたるの多くとびちがひたる。又、たゞ一二など、ほのかにうちひかりて行もおかし。雨などふるも、おかし。

秋は夕暮。夕日のさして山のはいとちかうなりたるに、からすの寝所へ行とて、三四、二みつなど、とびいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさくみゆるは、いとおかし。日入はてて、風の音むしの音などいとははれなり。

冬はつとめて。雪のふりたるはいふべきにあらず。(以下略)

鏡花は、憧れライバル視もしていた一葉の愛読書でもあった『枕草子』をよく読み、自らの文章のスタイルにまでしていたこと、「雛がたり」の冒頭部分など見ればよくわかる。

- (13) 但し元通妙寺に安置されていた卯辰山中善妙寺の摩耶夫人像は、右袖から生まれたばかりの釈迦像を覗かせ、松任市行善寺の摩耶夫人像は、夫人の右袖から生まれ落ちる釈迦と、その下で右手を挙げて、天上天下唯我独尊の形で立つ、釈迦像がそえられている。又、「胸前のからくり」が「カラリと開くと」、「胎児」が「もう一体」「入れ子状にうずくまっている」(ちくま文庫『泉鏡花集成』8 解説 女と人形)らしい。鏡花が机の傍に置いていた夫人像の胸には、右横をむき夫人の顔を見上げるような赤子の釈迦が収められている。「釈迦八相倭文庫」では、摩耶夫人の胸の「乳房」は、夫人の夢に、釈迦が白象の青蓮花に乗って現われ、受胎する折にも、その後病に伏し、十二月になつても出産の気配もなく、夫人自ら命を絶とうとする折にも、又三年後の提婆羅樹下での釈迦誕生の後でも見られ、重要な役割を果している。母乳は幼子がこの世で生きる為の命の源。又母親の懐は子供にとって、最も安全で心地よい場所だが、更にこの胸は心、仏教本来の「三界唯一心」「心外無別法」の仏教本来の理を示しているのではなからうか。

- (14) 「泉鏡花蔵書目録」(『鏡花全集』岩波書店 別巻 月報29)に、この書は記載されている。但し十一月まで未公開。(1)の写真からも、鏡花所蔵の事実が確認できる。

- (15) 「いろ扱ひ」「談話」(明34・1)には、次のようにある。

ほんの子供の内に読んで本についてお話をするのでございますよ。(中略)小説、草双紙、京伝本、洒落本と云ふ其積りで申しませう。母が貴下、東京から持つて参りましたんで、雛の箱でさされたといふ本箱の中に『白縫物語』だの『大和文庫』『時代かゝみ』大部なものは其位ですが、十冊五冊八冊といろいろな草双紙の小口が揃つてあるのです。母はそれを大切に持して綺麗に持つて居るのを、透を見ちや引張り出して――但し読むのではない。三歳四歳では唯だ表紙の美しい絵を土用干のやうに列べて(中略)絵を見ると理解が聴きたくなつて、母が裁縫なんかして居ると、其処へ行つて聞きましたが、面倒くさがつてナカ／＼教へない。夫を無理につかまへて、ねだつては話してもらひましたが、無ぞ煩さかつたらうと思つて、今考へると気の毒です。(中略)始終絵ばかりを見て居たものですから、(中略)口絵だの、挿絵だのを写し始めたんです。(中略)父親が金属の彫刻師だものですから、(中略)其仕事をさせる積りだつたので、絵を習へと云ふので少しばかりネ、(中略)近所の女だの、年上の従姉妹だのに、母が絵解をするのを何か聞きかじつて、草双紙の中にある人物の来歴が分つたものだから、鳥山秋作照忠、大伴の若菜姫なんといふのが殊の外、蟲貞なんです。(中略)母はからだ弱くて……大層若くつて亡くなりましたが……亡くなつた時分に、私は十歳だつたと思ひます。其の前から小学校へ行くやうになつて、(中略)石盤をはふり出して、いきなり針箱の上へ那須多羅女の泣いて居る処を出されて御覧なさい。悉達太子を慕つて居るのと絵解をするものは話さねばならないでせう。(中略)蟲貞なのは京伝と、三馬、種彦なぞです。(中略)種彦のものが大好だつた。え、此のごろでも草双紙は楽しみにして居ます。それに京伝本なんぞも、父や母のことで懐しい記念が多うございますから、淋しい時は枕許に置きますとね。若菜姫なんぞ、アノ画の通りの姿で蜘蛛の術をつかふのが幻に見えますよ。

と。へ内的絵解の部分に相当するかと思われる見開きの絵が、大阪府立中の島図書館や續帝國文庫の『釈迦八相倭文庫』の中にある。又、この草子の絵によつたかと思われる文章が、『夫人利生記』の中にある。

(16) 磯村英樹『文壇資料 城下町金澤』(第一出版センター)

(17) 腐敗ほど恐ろしいものなかつた鏡花は、『豆腐』の肉(にくづき)をとつて、『豆腐』と書いた。物かきとして文字を畏れ大切にした鏡花を、よく知つてゐるはずの「水上瀧太郎にしてはいささか不用意だろう」と、(1)にはある。

(18) 松村友祝『泉鏡花』編解説(作家の自伝41『泉鏡花』日本図書センター)

(19) 村松定孝『泉鏡花と谷崎潤一郎―母を恋う二つの魂』(定本 泉鏡花研究)有精堂

(20) 『泉鏡花蔵書目録』には、『釋迦八相倭文庫』の外に、『いろ扱ひ』にも見える『時代加々見』や『白縫物語』、そして又『修紫田舎源氏』などの草双紙が見られ、(1)には『田舎源氏』を貼りこんだ屏風や草双紙用の本棚の写真が載つてゐる。

(21) 『一之巻』には、次のような文章がある。

去にし年、母上病あらたまりて、ものを見ることを得したまはざりしほどのことなりき。

寒さ烈しき頃なれば、奥の間なる三畳に、南枕に臥し給ひ、祖母あり、父あり、医師あり、予といとけなき弟と、居坐ひ正しくかしこまりて、互に面を見つるほど、寂として身動きもしたまはざりし母上の、静に雙の目を眠りしま、両手を空にさしのべつ。また枕頭なる畳の上を、ものを取るさまをして、搔さすり搔さすりしたまひしを、父の見て差寄りて、いかにせし、欲し求むるものありやと、耳近ういはれしに、空にも、地にも美しく妙なる香はしき、紅なるが、紫なるが、白きがいろ／＼咲満ちたり、二人の児等に手折りて、

異界の中の母なるものへの憧れ

取らせむ。見たまへ此処にも、あれ、かしこにも、と紅梅の苔綻ぶ状に、結ばりたる唇とけて、うつとりと、かすかに微笑みたまひしかば、あはれ、いまはのうつ、にも、さまで児等のいとときかと、予と弟とを引寄せつつ、祖母のひたと泣きたまひしを、日を経、月を経、年経れども、なほまのあたりに見る如く肝に銘じて覚えてたり。

(22) この国麿にモデルがあり、その人物は、古来より社地だった久保乙剣神社が、天和二年(一六一六)の頃、藩の用地になって、卯辰山に移転された跡地を居邸に賜わり、その二百七十年後明治四年の廃藩置県の際、売却して退去した西尾家最後の人、西尾彝倫であると、(8)に記されている。明治九年に再び遷宮したこの神社の境内は、幼い鏡花にとって、終生忘れることのできない懐しい遊び場だった。

(23) 徳田秋声は鏡花の顔について、

白晳の皮膚に金沢産の林檎のやうな淡紅味のさした丸い綺麗な顔、桃色の頬をした丸顔の美少年

などと記している。

(泉鏡花といふ男
「光を追うて」十四)

(24) 『日本国語大辞典』(小学館)第二版には、照葉狂言について、次のように記している。

「てには俄狂言」の変化したものと、照葉という女性が創始したからともいう)江戸末期から明治中期まで流行した民間演芸の一つ。能や狂言に、当世風の俗謡や踊をまじえ、歌舞伎の所作を取り入れた演芸。囃子に三味線を加える。てるは狂言。